『西岡九条の会』だより

会報　第５４号　2012年６月

編集・発行　「９条の会」アピールに賛同する「西岡九条の会」
連 絡 先　岡野（５８１－５１２９）　猪狩（５８２－８６４０）　伊藤（８５２－４９３６）

メッセージ

ドッコイ生きている＜原子力村＞――大飯原発再稼動の教訓

５月５日、泊原発３号機を最後に、全国すべての原子力発電所が停止になりました。その日は、ちょうど「子供の日」でした。全国の新聞の俳句欄には、子供のためにその事を喜ぶ大同小異の作品が選ばれていました。作者も選者も、ホッと胸をなでおろす気持だったのでしょう。

一方、この原発停止を醒めた目で見ている人もいました。その人は「無敵だった相手が土俵ぎりぎりまで追いつめられて、このまま黙って去っていくだろうか。そんなことはあるはずがないと思う。すべての原発がいったん活動停止になったのも、向こうのシナリオなんじゃないかと考えるのは穿ち過ぎか。」と書いています（室井佑月『週間朝日』６月１日；ｐ．４９）。

果して、“当たらずと云えども遠からず”でした。野田首相は、昨年９月１３日、国会所信表明演説で、「定期検査後の再稼動を進めます」と宣言していたのです。だから大飯原発の再稼動についても、当然のように「私の責任で判断する。」と言いました。そして、福井県知事の執拗な求めに応じて、６月８日に形ばかりの記者会見を開き、全国的に「再稼動の必要」を強調しました。しかし、首相に大飯原発について科学的根拠に基づく判断力があるはずもありません。安全については、今後、福井県の原子力専門委員会が、首相の意向にそって、政府の安全対策を受け入れるのだそうです。

ドッコイ、国策の“原子力村”は生きているのです。

ところが、スイスでは違います。スイスの「原子力安全規制局」はフクシマ原発事故の分析と調査の結果を発表しています。昨年の１０月２９日付けです。得た教訓は３９項目におよんでいます。例えば、

★住民に対して、予想される放射線被害と汚染の情報を事前に伝えていない；

★非常事態に対する準備が企業にまかされていた；

★使用済み核燃料プールなど建築構造上の不備があり、非常対策が困難である；

など、問題を指摘しています。日本の国会の「事故調査委員会」は何をやっているのか、と云いたくなります。スイスのことは、北大大学院吉田文和教授の講演資料（５月２７日）によるものです。

なぜ、このような事になるのか、深い理由があると思いますが、ご一緒に考えましょう。

先月の俳句

◎全原発が止まった記念日こどもの日（石山恵詩）
◎鯉幟原発停止の宙に跳ね（西川知子）
◎フクシマの蝶がモスラになる悪夢（樋口雄二）

【厳しい忠告】

“原発の安全に責任を持つ専門家には、各国の政府や権力者を相手に一歩も引かない強い意志が求められる。技術的な検査で何十年も合格のサインをしてきただけの専門家たちを今後も使うとしたら、状況は何一つ変わらないだろう。”――ウォルフガング・クロンプさん（ウィーン天然資源・応用生命科学大学名誉教授）

［『朝日新聞』2011年９月６日　*耕論*：欧州の原発より］

西岡九条の会：学習会

- □ テーマ　海の放射能汚染―マグロやイカのお刺身は大丈夫？
- □ 講　師　水口憲也さん（東京海洋大学名誉教授）　［インタビュー：森の映画社製作］
- □ と　き　７月８日（日）１３：３０～１５：３０
- □ ところ　西岡福住地区センター（西岡３条９丁目）